
星に誓いを

金弘 美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星に誓いを

【Nコード】

N3937G

【作者名】

金弘 美樹

【あらすじ】

一日遅くなりましたが、ホワイトデー企画の高佐ストーリーです。『チヨコレートよりも甘い夜』や『言葉はなくても』を読んでいただけるとより楽しんでいただけるかと思えます（ちゃっかりPR）思いつきり甘〜いラブラブ高佐をどうぞ召し上げれ！！

本庁に戻る前に立ち寄ったコンビニで高木はパラパラと雑誌をめくりながら思案していた。立ち読みしている事も忘れて、顎に手をやり真剣な表情で何やらブツブツ呟くその姿は端から見れば奇しいの一言に尽きる。しかし、そんな事にはお構い無しで高木は何やら一心不乱に考え込んでいた。高木が熱心に読み耽っている雑誌のそのページにはこんなタイトルがついている。

『恋人の心を掴むホワイトデー』

そう、高木が怖いくらい真剣な顔で思案していたのはホワイトデーに何を贈るか、ということらしい。当然相手は高木の恋人、佐藤美和子である。

高木としては、バレンタインデーに『佐藤自身』というこれまでの人生の中で最も心に残る最高のプレゼントを貰った訳だから、自分もホワイトデーには佐藤の人生の中で最も心に残るプレゼントを贈りたいと思っているのだ。

しかし、それが何なのかと聞かれると返事に困る。だからこうして雑誌をめくって考え込んでいる訳なのだが、高木が求めている答えはちっとも見つかりそうにない。指輪は既にプレゼントしてしまっただし、光りモノに全く興味の無い佐藤の事だ。アクセサリーなんて贈られたら逆に困ってしまうだろう事は既に過去の体験から十分承知している。

美和子さんの喜びそうなモノといたら食べ物だけだ。

佐藤が大好きな洋菓子店の焼き菓子は、先週末既に予約してあった。これは1課で貰った義理チョコのお返し用にしよう決めていた。先月14日、高木は佐藤ファンの陰謀で非番を割り当てられていた。しかし、その翌日。出勤した高木が何気無く机の一番上の引き出し

を開けると、そこには綺麗にラッピングされた小さなチョコがちょこんと鎮座していた。驚いて隣の席を見ると、佐藤がぶつきらばうな口調でぼつりと呟く。

「余ったのよ。」

その頬が微かに赤く染まっているのを見て高木の頬は緩んだ。

「義理チョコありがとうございます!」

満面の笑みを浮かべながら、わざとらしく『義理』の部分強調して礼を言う高木に、

「べ、別に。余ったから入れといただけよ。」

佐藤は相変わらず愛想の無い返事を返したのだった。この時貰った義理チョコに対するお返しは迷う事なく直ぐに決まったのだが、肝心の『佐藤の心に残るとびっきりのプレゼント』がどうしても出て来ない。

食べ物ばかりってのもちよつとなあ……

高木は大きな溜め息を吐き出す。洋服や靴はサイズや好みがあるから選ぶのが難しいし、花だと何だかありきたりなような気がする。

休暇を取ってどこかに行くってのもアリだな。

ふと思い付いて。

でも二人で同じ日に休暇届けを出したら、またあの人達に張り込まれちゃいそうだしなあ。

再び嘆息を吐き肩を落とす。なかなか妙案は浮かびそうに無い。高木は読んでいた雑貨ぱたと閉じると、ぬるくなった缶コーヒーを片手にレジへ向かった。しかし。

妙案が浮かばぬまま慌ただしく日々が過ぎ、さすがに焦り始めた3月のある日、高木はとうとう探し求めていたそれを発見する事になる。

これならきつと美和子さんも喜んでくれるに違いないよな。

やっと見つけた『佐藤の心に残るプレゼント』に、高木の頬は締め無く緩んだ。

ひと足先に本庁に戻っていた高木から一緒に帰ろうと誘いを受けたのはほんの数時間前の事だ。急いで残っていた仕事を片付け、先に退庁した高木の後を追うようにして退庁した佐藤の心は確かに自分でも呆れるくらい弾んでいたはずだった。そうほんの1時間程前までは。

高木の車の助手席で、佐藤は今日何度目かの深い嘆息を吐いた。

「少しドライブしませんか？」

と高木が提案してくれた時、佐藤はとても嬉しかった。久しぶりに高木とデートらしいデートができるのだと思うと、自然に笑みが零れた。

「どこに行くの？」

満面の笑みを浮かべて尋ねる佐藤に、

「内緒です。着いてからのお楽しみですよ。」

と悪戯っぽく笑う高木が可愛くて、幸せすら感じていた。ところが。

本庁を出てから既に2時間近く経過した今もなお、車は都心を離れ、ドライブコースと言うには程遠い道をひたすら走り続けている。

「ねえ、一体どこに行こうつもりなの？あれからもう2時間も経つよ？いい加減教えてくれたっていいじゃない。」

痺れを切らした佐藤があからさまに不機嫌な顔で高木を睨みつける。

「それは着いてからの楽しみですよ。」
高木は苦笑を浮かべながら、もう何度も繰り返された言葉を再び繰り返した。

もうっ。どうしても教えてくれないのよ。

佐藤の苛立ちがいよいよピークに達しようとしたまさにその時、まるで図ったかのように高木が車を停めた。ヘッドライトを消してしまつとたちまち辺りは闇に包まれる。その予想外の暗さに佐藤は戸惑った。いつの間にか車を下りた高木が助手席のドアを開け、不安げな表情を浮かべた佐藤の顔を覗き込む。

「行きましようか。」

穏やかな口調で促す高木に佐藤はふるふると首を横に振る。

「やだっ。怖い。」

思わず本音が漏れる。拗ねる佐藤の頭を優しく撫でながら、高木は小さい子供に言い含めるようにそっと囁く。

「大丈夫ですよ。オレが傍にいますから。ね？」

屈託の無い笑顔を向けられて、佐藤は小さく頷いた。差し出された手をぎゅっと握る。高木に促されるまま佐藤は車を後にした。

大きくて温かい手に引かれながら暗く細い山道を進む。鬱蒼と生い茂る木々の間を抜けると、突然目の前がぱあっと開け、高木がおもむろに立ち止まる。

「うわぁ……」

つい先程まで無言で高木の後をついてきた佐藤は思わず感嘆の声を上げる。

「綺麗……」

視界に広がった空一面に無数の星がキラキラと瞬いている。うつとりと見上げる佐藤に安堵の笑みを浮かべた高木が問う。

「凄いでしょっ？」

佐藤は素直にこくと頷いた。

「とっても綺麗。何だか手を伸ばしたら届きそうなくらい空が近いわ。」

よくこんな場所見つけたわね。と佐藤は優しい笑みを浮かべて高木を見上げる。高木は少し照れ臭そうに頬を掻きながら答えた。

「ホワイトデーのプレゼントですよ。東京ではなかなか星なんて見られませんからね。あちこち探し回ってようやく見つけたんですよ。」

佐藤は目を細めて満面の笑みを浮かべる。

「大変だったでしょう？ 涉くん、ありがとう。」

つられて高木も満面の笑みを浮かべた。しかし、高木は直ぐにその笑みをひっこめると真面目な顔で上着の内ポケットをこそこそ探り始める。その様子を怪訝な顔で見つめる佐藤の前に、何か差し出された。それは宛名の印刷された無機質な封筒。しかし、印刷された宛名に心遣りは無い。

「何？これ。」

佐藤は差し出されたそれを受け取り不思議そうに問い掛ける。

「開けてみて下さい。」

言われるままに糊付けされていない封筒を開けてみる。中には丁寧に折り畳まれた白い紙が一枚。佐藤は怪訝な顔でそれを取り出し、そつと広げる。

「これは・・・？」

なんだか良く解らないそれに首を捻りながら高木を見上げると、

「すみません。本当は今日、美和子さんの名前がついた星をプレゼントしようと思ってたんですよ。でも間に合わなくて。」

それ、申し込み用紙なんです。と高木は申し訳なさそうに答える。

「星・・・名前付けれるの？」

佐藤にとってそんな話は初耳だった。小首を傾げながら聞き返すと、高木は小さく微笑んだ。

「オレもネットで調べて初めて知ったんですけど、今名前が付いている星はほんの一握りなんだそうです。肉眼で確認できる星でも名

前が付いて無い星はまだまだ沢山あって、その中のひとつに好きな名前が付けれられるんですよ。だからそのひとつに美和子さんの名前を付けてプレゼントしようと思って。」

世界にひとつだけの美和子さんの星をね。と高木は照れ臭そうに笑う。

「私だけの・・・星？」

ぽつりと呟いた佐藤の言葉にこくりと頷く高木の笑顔がぼんやり滲み、やがてゆらゆらと揺れた。

「名前を付けたら天文台に登録されて永久に残るんだそうですよ。名前を登録する日も指定出来るそうですから、登録日は美和子さんの誕生日にしてあるんです。明日にでも出せば今度の誕生日にはなんとか間に合うと思いますから。」

誕生日にはまた一緒に見に来ましようね。

少年のように屈託のないとびっきりの笑顔で高木が囁く。

「うん。」

頷いた瞬間、佐藤の瞳から大粒の雫が零れ落ちた。それはとめどなく溢れ出し、頬を濡らす。高木が穏やかな笑みを浮かべてその透明な雫を指先でそっと拭う。

「ごめ・・・嬉しくて・・・」

謝る佐藤をぎゅうつと抱きしめて、高木が耳元でぽつりと囁いた。

「愛してるよ。ずっとずっと。永遠に。」

愛しい恋人が紡いでくれる愛の言葉に佐藤は幸せな気持ちで何度も頷いた。

「ありがとう。私も永遠に愛してるわ。」

高木の腕に抱かれたまま、佐藤は静かに顔を上げる。空には相変わらず満天の星。二人はどちらともなく引き寄せられるように唇を重ねた。無数の星だけが永遠の愛を誓った恋人たちを静かに見つめていた。

(後書き)

一日遅くなりましたが、何とかアップする事が出来ました・・・
こんなロマンチックなシチュエーションで愛を誓われたらこっちは
困ってしまいますね（おいっ！）急いで書いたので（しかも徹夜
で・・・）とところどころおかしなところがあると思われます。すみ
ません。ああ、今回も高木くんは原作5割増のかっこよさで書いて
しまった・・・こんな事されたら佐藤さんもますます高木くんを
好きになっちゃいますよねえ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3937g/>

星に誓いを

2011年1月13日15時09分発行